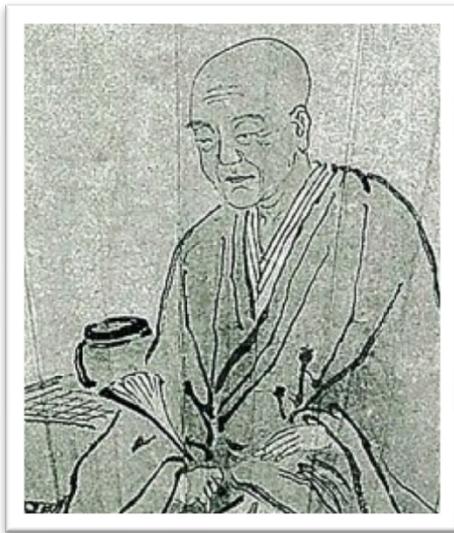


# 白浪の碁

北野寿碁碁同好会 刀根 正樹

正月松の内、北野駅前養老乃瀧に、碁楽連の面々が集い、新年会の花を咲かす。話題は自然に碁碁のこと。プロ並みの解説がとび出しにぎやかなこと。会長はふとまどろんだ。青い海が見え、白波が踊っている。青春の日々がよみがえる。

『ヤイ起きねえか。ボケ会長。北野の白波。日本駄工門、いやさ土左工門』目の前に、鬼平に似た顔が迫っていた。『会長の碁は、白波の碁だな。中国では盗賊を白波という。歌舞伎でも白波が暴れている。会長は妖術で、模様を大ガマに変身し、おれの石をペロリと呑み込む。御用だあ。待った。待ちやがれ』『君は、碁にも酒にも、待ったが多い。碁は真剣勝負だ。白波五人男など、甘っちょろい世界ではない』『つらつら碁の歴史をひもとくに、本因坊丈和という大泥棒がいた。日本駄工門にあたる奴よ』と鬼平がうそぶいた。目に不敵な光をたたえている。



本因坊丈和

『吐血の局で有名な丈和が、白波とは面妖な。道策や秀策と並ぶ、碁聖ではないか』『知らざあいつて聞かせよう。そもそも丈和の生い立ちには謎が多く、知られざる闇の部分がある。本因坊門下に入り、四十にして、すっかり本因坊の家督を継いだ。次に幕府の名人碁所を狙い、謀略をめぐらせ、争碁せずに、まんまと碁所を盗み取った』

『天保の内訌のことだろう。丈和は、ライバルの井上因碩や林元美に、将来八段に昇段させ、碁所もゆずるとか、だましたとある。現代の政界では、日常茶飯事のことだ。白波と非難するに当たらない』と会長は丈和をかばう。

『怒れる因碩は、老中松平周防守の碁会で、一門の秘蔵弟子、赤星因徹を丈和にぶつけた。丈和に恥をかかせ、碁所から追い落すという、因碩得意の孫子の兵法だ。これまで対局では、因徹が優勢であったが、実は丈和が猫をかぶり、実力をかくしていた。さ

らに井門(井上家)の秘伝も、密偵を使い、盗んでいたという』『かくて史上名高い吐血の局がおこなわれたが、名勝負であったと聞く。因徹が破れ、血を吐いて死ぬが、結核をわずらっていたのだろう』と会長は丈和の肩を持つ。『白波五人男の赤星十三郎は、稀代の美少年であったが、赤星因徹も白面の美青年だ。責任の重さから、堅くなった因徹を、丈和はもて遊び、強腕で痛めつけ、さいなみ続けた。因碩は高僧に頼み、丈和の折伏の祈祷を行っていたという。死神は丈和の毒気にあてられ、因徹の体に逃げ込んだのだろう』

(碁楽連だより 第 210 号 2009 年 2 月 1 日)